

松江市立鹿島歴史民俗資料館だより

No. 36

2023年6月発行

■ 貴重な日露戦争前後の資料を発見

このたび、鹿島町御津の民家から、日露戦争前の明治33(1900)年、歩兵浜田21聯隊(当時はまだ歩兵松江63聯隊はありませんでした)に入営、3年の兵役を終えたのち、日露戦争の勃発により、予備役として招集され、戦地で亡くなった兵士の書簡や、聯隊での学科を記した資料80余点が発見されました。

実家の兄にあてた書簡では、聯隊での訓練や生活の様子、演習の具体が細かく書き送られ、故郷での伝染病の流行を心配したり、浜田の漁業事情を知らせるなど、貴重な内容となっています。また、聯隊での学習は、隊の歴史にはじまり、軍の編成、兵士の心得など多岐にわたり、口頭試験に向けた問答集もあって、熱心に学習した様子や当時の軍が兵士に求めた内容がよくわかります。

資料館では、これらの資料などをもとに今秋、特別展を開催する予定です。

このち、日本は太平洋戦争に進みますが、そこでは兵士だけでない銃後の暮らしや、鹿島では船の徴用もありました。

こうした資料や写真が皆さんのお宅にも残されていないでしょうか。資料館にぜひご連絡ください。ご希望であれば、匿名での展示も可能です。失われそうな歴史を今、記録しておきたいと思っています。



今回発見された「門田喜一文書」

■ 資料紹介—日本最古級の木棺墓・堀部第1遺跡

1990年代後半に鹿島町は南講武堀部(現在は北講武)にて福祉ゾーン整備を計画、1996年から1999年に一帯の発掘調査が行われ、縄文時代から古墳時代にかけての複数の遺跡が見つかりました。

今回紹介する堀部第1遺跡では、講武川沿いの田圃の中にあつた、地元で「長者の墓」と呼ばれていた直径35メートルの独立小丘の周りを半円を描くように、弥生時代前期の57基の墳墓と壺棺からなる集団墓が見つかりました。墳墓は墓の上部に石を載せた標石墓です。ここでは中には200個もの石を使う墓もあり、その系譜は朝鮮半島に求められます。ここは、中国・朝鮮半島から北九州を経て新天地を求めた渡来系の人々の墓なのです。

墓穴の中には木棺がしつらえてありました。木棺はその場で板木を箱型に組み合わせるもので、埋葬される人の身長に合わせて作ったようです。ここは低地であつたため木棺が腐ることなく、非常にいい状態で残っているものがいくつも見つかりました。

1999年3月には国立歴史民俗博物館の当時の館長の故佐原真さんが見学に訪れ、残存する中で「日本最古の木棺」とコメントされ、地元紙の一面を飾るなどマスコミ各社が報道し、大きく注目されました。

堀部第1遺跡は、島根県の弥生時代の始まりを考えるうえで重要な遺跡であることから、一部は現地で保存、周辺とあわせて史跡公園として鹿島多久の湯奥に整備されています。

木棺は、子供用、大人用各一基を現在資料館で展示しています。



19号墓。墓穴の中には木棺が残る



展示中の大人用木棺。16号墓